

## 米国陸軍四方山話1～3

### 米軍陸大教授体験記



松浦 昇

副代表

松浦 昇

予科 2-7

歩兵 5-1

(狭山市)

#### はじめに

私の自衛隊生活 33 年のうち、米国陸軍の諸学校への留学及びその教職員としての勤務の合計は、約 5 年に及び、戦前戦後を通じ日本人としては、最長の米軍施設内での体験生活であったと思われる。その後も数度に及び視察等の機会がありそれらを通じて得た米陸軍等の知識や内情は職務遂行上役立つものがあつた。

太平洋戦争開始に当たっての旧日本陸軍の、米軍についての事実認識は一体どの程度だったであろうか。詳細で具体的な対ソ・対支情報に較べて、対米情報は、かなり泥縄式のものではなかったかと推測される。

米側の対日本陸軍研究は、軍将官の個人情報にまで浸透した、細部に亘る徹底したものであつた。私が米国陸軍指揮幕僚大学(旧日本軍の陸軍大学校に相当、ここでは米国陸軍大学という)で「日本軍事学講座」を開き、「日本軍制史」等を担当した際、膨大な海兵隊を始めとする米各軍の戦時資料

の存在で、身をもって実感したところである。

大戦中の日本軍高級指揮官・参謀等に対する米軍側の評価は、勝利者側としては当然ながら、過酷な程極端に低く、本当に悔しい思いをしたが、その中にあつても、硫黄島の最高指揮官栗林中将の善戦敢闘振りには海兵隊を始め米全軍が絶賛をしているのである。惜しむらくは、彼のように米軍の戦略・戦術を米本土で研修し身につけた日本陸軍の将星が極端に少なかったことが、よく言われる物量上の劣勢と共に、このような敗戦の苦汁を招来した一因ではなからうか。米軍の制度、慣行、不文律などは一般的には理解し難いものが多く、公式の記録や資料だけではカバー出来ない面が出てくる。私の尊敬する日本の超一流の戦史作家が書いたマッカーサーの各伝記でも、何か所か誤謬が見受けられるが、その原因はこのような点にあつたものと思われる。

本稿では、これらのあまり知られていない米軍内部の事柄について、四方山ばなし的に説明をしてみたい。

#### 1. 将校は同時に 2 つの階級を持つ

##### <大将は保証された階級ではない>

米軍将校は、陸・海・空・海兵隊を問わず 2 つの階級を同時に持つことを知っている日本人は少ない。

将校名簿には 2 つの昇任日付が記載されている。階級章で明示され、公的に処遇されている臨時(テンポラリー)階級と、議会によって保証され、内部に存在する永久(パーマネント)階級の 2 つについてである。

宣戦布告された正規の戦争の時だけ経命

が認められる元帥(5つ星)は特別で、臨時は無く、永久のみである。つまり、マッカーサーの例のとおり、終身現役元帥となる。将官の、元帥以外の永久階級の最高位は少将である。従って、大統領は簡単に、臨時階級の少将以上大将までの飛び級人事を行えるのである。

(例)○元国務長官ヘイグ氏の中将を飛び越しての大将昇任。

○ベトナム戦当時大統領命に反して一挙に少将に降格された空軍大将。

大動員した各軍が戦後平時体制に復帰する時は、一部を除き全将校が数階級ダウンして永久階級に戻る。第一次大戦後アイゼンハウアーもパットンも、大佐ら少佐に降格されている。

マッカーサーも、陸軍参謀総長・大将の職を辞任して、フィリピン軍育成のため現地へ赴任した際には現役少将に格下げられた。その後退役したが、日米開戦直前の7月に少将として現役に復帰して極東米陸軍司令官に就任、翌日には中将、更に年末には大将に復帰している。

## 2. 米軍士気の根源は愛国心と宗教心

### <牧師も軍服を着て階級を持つ>

軍隊の士気を振作し規律を維持する根源として、愛国心を挙げることは当然のことであるが、戦後の日本では憲法上の規制からか、慣例的な宗教的行為でも、それを潔癖過ぎる程、問題視しているように思われる。この日本の現状は、世界中のやや異端児的存在ではなからうか。「兵も将軍も戦死したら、等しく靖国神社に神として合祀される」ことが、戦場での兵士の戦意を大

いに高めたことは周知の事実である。

米軍内の宗教の存在は、旧日本帝国陸海軍以上に牢固たるものがある。軍隊の各駐屯地内には必ず教会が存在、各種の公式行事に密接に関与している。陸大のあるフォートレブンワースにも立派な協会が3つ、新教、旧教、ユダヤ教のものがあり、学校内行事等で公的に活動している。軍の職種の一つとして「牧師科」があり(職種徽章は、キリスト教とユダヤ教の2種)、将来の大佐以上を目指して、戦闘職種の将校と一緒に戦略・戦術を勉強している。これは旧軍の従軍僧とは比較にならない処遇である。

近隣諸国の干渉等に屈して、靖国神社への総理の公式参拝を遠慮するようなわが国の国情は、有事に兵士の士気高揚という観点では如何なものであろうか。

## 3. 米国の勲章は軍人のためにある <等級のない米国の勲章>

日本では、春・秋の2回に定期叙勲が行われ、多くの政治家、学者、元公務員などに上位の勲章が授与される。これはこれで意義深いものがあると思われるが、世界各国の勲章の歴史からはやや異例ではなからうか。元来勲章は、戦場での兵士の勇敢な行動に対しその場で顕彰するのが本旨であり、その趣旨に極めて忠実なのが、米国の勲章制度である。従って最上位の大統領勲功章(メダル・オブ・オナー)などは明確に「米軍人」と対象者を規定している。日本の例のような、外国国賓等に対する外交儀礼的授与は無いのである。一部の勲章は外国軍人や米軍関係の文官も対象としているがその種類は限定されている。また、叙勲は

その都度行われるのが原則で、全国統一の定期的な行事は無い。それぞれの勲章には上下の格付けはあるものの、それぞれの勲章の中には日本のような「勲一等」や「勲八等」などの等級は無い。



#### Ligion of Merit 勲章

(正章、副章、私服に付ける襟章)

私が畏友故松永力君と一緒に貰ったリジョン・オブ・メリット勲章は、外国軍人に授与する場合のみ段階があるが、それも勲章本体は同じで、綬につける徽章などで差があるだけである。

日本の勲章には氏名の刻印はないが米国のそれには裏面に明確に印字されおり、安易な処分が出来ないのも特徴の一つであろう。

秩父平成12年7月 68号

## 米国陸軍四方山ばなし 2

松浦 昇 予科 2-7 歩兵 5-1 (狭山市)

### 4. 愛妻でも止められない夫のベトナム戦線参加

#### <ハンバーガー・ヒルの死闘>

ベトナム戦での米国版「203 高地肉弾攻撃」として有名な「ハンバーガーヒルの戦い」の米国側の指揮官がハネカット中佐で、彼は陸大で私の「テーブル・メイト」であった。

米軍の戦術等に不慣れな外国人留学生を教室内で手助けする「ご学友」である。歩兵、砲兵、機甲各種の経験豊かな経歴の米陸軍将校が指名され、教室内の討議などで留学生をサポートするわけである。彼は陸軍省高官の副官をしていたとかで傲慢不遜の生粋のヤンキー気質、討議で教官に「噛み付く」習性があった。戦術の宿題の答案では、自分の案が最良であると私に誇示し、強引に押しつけてきか、毎回、私の案が原案に近いと分かると、宿題をして来なくなり、指名されると私の答案を取って読み上げるといった極めてサッパリした人物であった。

米軍将校は、それぞれの卒業後の補任について、中央の人事担当者による面接が行われるが、彼は提議されたワシントンの勤務を蹴って強引にベトナム行きを主張したそうである。

彼の奥さんは泣いて戦線行きを止めたが、説得出来ず、私に「何とか思い止らせてください」との事。愛妻の涙の訴えさえ

無視する彼が一友人の説得に応ずる筈もなく、結局、勇躍硝煙の立ちこめる戦線に赴任したのである。

当時、米国内には反戦気運が大きく広がりを見せており、日本のマスコミも大々的にそれを報道していたが、大学内の米軍将校達は殆ど全員が強く第一線行きを希望する風潮が見受けられた。



### 米軍将校の就任式 昇任は上司と妻のおかげ

これは軍人としての使命感から当然とも言えるが、更に、数多くの理由があったのである。即ち、昇任や叙勲の機会、国家費用での修士号取得、人事面や家族の優遇措置などのプラス面が多かったのである。

然し何と言っても、「胸に輝く勲章の魅力」と「戦歴無しでは、軍人としての誇りが保てない」ことがその最大の理由あったと思われる。「ハムバーガー・ヒル」山頂の北ベトナム兵の鉢巻き陣地に対して、ハネカット大隊長は、強引に強襲突撃の繰り返しを厳命、3度失敗し、4度に遂に成功した。

部下の死傷は物凄く、兵の怨嗟の声は直接、本国のロバート・ケネディ上院議員へ届き、マスコミも大いに騒いだが、陸軍中央部はやはり立派で、翌年彼が大佐に昇任したことをニュース・ウィーク誌で知り、軍の主体性について安心したものである。

### 5.米軍上級将校は高学歴、大佐以上は修士号保持が原則

#### ＜陸大で付与できる修士号＞

米各軍の大佐以上の殆ど全員が、一般大学の修士号か博士号の保持者あることには、日本人はみんな驚嘆するに違いない。大佐への一大関門になっている米国陸軍大学の入学者の半数以上が既にそれらの保持者であり、更に、日本と大きく違って、この陸軍大学にも他の一般大学並みに正式の修士号授与権(軍事学修士)がある。

一般大学と共通単位ももらえるので、卒業後、機会を見つけて、軍の費用で他の大学での学位を短期間に取得できるのである。その為にもこの軍の大学では、定期的に一般大学の学長グループによる学術レベルの検証を行っており、この時の校長以下の陸大首脳の気遣いは大変なものである。旧軍や自衛隊では全く思もよらない「軍民の合流」である。

このため退職後、軍からの就職援護無しに、大学教授などの仕事を自ら開拓することが出来るのである。

また、ウエスト・ポイント陸軍士官学校と一般大学との差も殆どなく、陸大でも一般大学出の学生が8割以上を占め、軍トップの高官にも一般大出が多い。私のクラスの同級生パウエル元総参謀長(州立大卒)もその一人である。

## 6. 兵士出身者にも、軍の費用で高学歴を与える

### <兵士出身でも軍のトップになれる>

これは、伝統的に職業軍人の養成機関が確立している欧州諸国では、なかなか難しいようだが、米軍ではさほど珍しいことではない。一例を私のごく身近な事例で紹介したい。

今から十何年前、自衛隊の某陸将がある都市に師団長として着任した。人格・識見共に誠に立派な、優秀な人物であったが、地元新聞のコラムで紹介され学歴は「旧制中学卒」であった。彼は戦時、「予科練生」であったが、そのまま警察予備隊に入隊、部内の幹部候補生に合格して幹部となった。その後は、才能を發揮し、次々と部内幹候としては異例の累進を続けたのである。勿論、旧軍の陸大に当たる幹部学校の指揮幕僚課程にも1次・2次試験の難関を突破して合格、立派に卒業している。しかし自衛隊内の教育とは関係の無い社会一般では、最後まで「旧中卒」のままであった。

一方、同じ時期に日本に駐留していた米陸軍のD中將の例を紹介してみたい。D中將は高卒後、18歳で兵士として軍隊に入り、部内幹部候補生制度で少尉に任官した。ここまでは某陸将と同じである。しかし米軍では将校は「大卒であるべき」であるので、軍の費用で南ミシシッピー大の歴史学科に進学、卒業している。さらに旅団、師団の幕僚を歴任した後、陸大に学び、そこで軍事学修士号を取得、後のジョージ・ワシントン大学の国際学修士号とともに2つの修士号を持っている。これは一般社会で通用する立派な経歴で、退職後も国際問題の事務所を開いて大いに活躍している。

## 7. 推薦入学の米陸大

### <旧軍同様に難しい自衛隊指揮幕僚課程の試験>

旧陸軍の陸大は入学試験の難しさで有名であった。初審の筆記試験と再審の面接試験が行われた。自衛隊の幹部学校の指揮幕僚課程への入学試験も、そっくりそのままのやり方を踏襲している。

このように難しい試験をパスするなら、もう、入学後勉強する内容は殆ど無いではないかと思われる程であった。従って、合格者も受験勉強がし易いポストや経歴・職種に限定され勝ちになる。勿論、旧陸大では陸士出身者に限定されていた。その点、米陸軍は各職種からバランスよく推薦されて入学してくるので、医者、看護婦、弁護士、牧師などあらゆる職域から万遍なく入校し、戦術・戦略を研鑽するので、実際の戦場でも組織を挙げて作戦を理解し推進出来る利点がある。

指揮官と極く一部の参謀だけで作戦の成否を牛耳るといったトップだけの独走は無くなるし、それぞれの分野でその作戦の成功に向けての貢献を積極的に行える利点がある。

これらの差異は、夫々の持つ戦術・戦略の研修の在り方にも大きく影響して来ている。よく日本の戦術は「哲学的戦術」で、米軍のそれは「素直な手続き戦術」といわれている。メッケルによって導入された近代日本陸軍の戦術は、策案選定に到る哲学的思索を重視するのに対し、米軍戦術は策案決定後の実行手続きにウエイトを置き、作戦の遂行をよりスムーズにしようとするものである。これが「女性にでも分かる常識戦術」であり、「持てる国の強み」と言

えるかもしれない。

秩父平成12年10月 69号

## 米国陸軍四方山ばなし 3

松浦 昇 予科 2-7 歩兵 5-1 (狭山市)

### 8. 将官旗を颯爽と靡かせる女性将軍

#### 〈看護婦も陸大で戦略を学ぶ〉

1970年の春、レブンワースの陸大内にある陸軍病院に、ワシントンから女性の将軍が視察にやって来た。車には赤地に大きな一つ星のついた将官旗が付けられている。准将である。日本の自衛隊には女性の一佐はいるが、将軍はまだ居ない。米陸軍は戦後2つの職種に准将以上を許した。ワック(女性兵)とナースである(現在は女性専門の職種であるワックは廃止されている)。

将軍になると数々の特典が付与されるが、その一つに服装の自己デザイン権がある。例えば階級章の星であるが、規定の大きさを遥かに越える大星にしても違反とはならないのである。レブンワースの教会にインディアン討伐で有名なカスター将軍の写真があるが、襟からはみ出るような大きな星を誇らしげにつけているのが極めて印象的である。マッカーサーが米軍の正式帽を用いず、終生常用したフィリピン軍の元帥帽も彼自身のデザインによるものと言われている。

日本陸軍では、看護婦の待遇はあまり高くなく、将校ですらなかったのはご承知のとおりである。因みにナース准将の軍旗の星は黄色の大きなものであったが肩の星は標準サイズで金色の上品なものであった。

女性が米陸大に正規の学生として入学

し、世界の男性将校達と一緒に戦略・戦術を勉強していると聞くと驚く人も多いと思うが、事実、1968年卒業の私のクラスでも20数名の女性学生が在籍しており、なかなか華やかな存在であった。将来、軍で身を立てる決意の独身者が殆どで、不思議にもスタイルの見事な美人揃いであった。頭の切れる美女に対してはとかく男性は敬遠しがちな傾向があるから、独身が多かったのかもしれない。

真面目でよく勉強するので、筆記試験が主体の課程の中頃までは、女性がクラスの上位を占めていたのである。この女性上位の現象は日本の一般大学でもよく見聞される所である。



中佐昇任を喜ぶ女性の陸大学生(1968年)

### 9. 全職域の人的資源を母体とした米軍指揮組織 〈上級指揮官・参謀を独占した日本の陸士・海兵〉

旧日本陸軍は戦前、多くの人材を欧州諸国や中国に学生として派遣し、その地の陸軍大学などで研修させているが、主敵となった米国には極めて少ない。レブンワースの米陸大には、インパール作戦で有名な第15師団長山内正文中将がただ1人、少佐の時に留学し優秀な成績で卒業しているだけである。多くの将校を米海大等に出した

海軍とは大きな差異である。北方の対ソ・対支が主体の陸軍としては、常備兵力 12 万 5 千人・5 個師団米陸軍は問題外だったかもしれない。

しかしこれが開戦後あっという間に 800 万人、200 個師団に拡張されたのである。

陸士出身者のみに、軍の指揮官・参謀職を与えていた日本と異なり、平時から ROTC 等一般大卒を陸士出身者と同格で陸大に入れ、卒業後は適当な時期に一般社会の指導層として還元、有事には陸大で短期のリフレッシュ教育を与えて師団長・旅団長・軍参謀などに補職すれば事足りたのである。

一般社会においても、「如何にヒト・モノ・カネを運用して組織を運用するか」戦術・戦略の演練には十分なのである。この点結果論として、旧日本軍は米軍であれば師団長・軍司令官が立派に勤まる一般大出身の人材を、単なる下級将校や下士官・兵としてしか使わなかったことになり、人材活用の点では米軍に劣ったとも言い得よう。

## 10. 指揮官の権限が絶対的な米軍人社会<家族まで巻き込むすさまじい競争の嵐>

米軍の昇任は「定数に対する欠員補充」で日本の様な定期昇任ではなく「その都度昇任」である。昭和 45 年正月、私は米陸大で一佐に昇任し、その儀式が校長室で行われた。校長と私の家内が両側に立って、新しい階級章を私の肩に着けてくれたのである。日本のような堅苦しい「昇任申告式」は無く極めて和やかであった。このことで象徴されるように、昇任は「上司と女房、

2 人のおかげ」で、それだけ上官の権限が強いことを意味している。アイゼンハワーが 9 年間もマッカーサーに仕えながら、長い間、少佐のまで捨て置かれ、彼の指揮下から逃れて僅か 4 年間で、中佐から大将まで昇りつめた話はあまりにも有名である。

また、米軍人社会では、「自分以外は全て競争相手」の風潮が蔓延しており、穏やかな生温い日本人社会では想像も出ないすさまじいものがあった。

米本土に所在する各軍の駐屯地は、一般的に総人口数万を擁する大きな社会を形成しており、陸大であれば、校長が駐屯地の総指揮官として全員を統率している。官舎はすべて駐屯地内にあり、その中には小学校が 3 校、中学校が 1 校、州立大学の分校などもあって、ちょっとした小都市である。婦人や子供達の各種の活動も極めて活発で、それらの指導組織の女性側の頂点には校長夫人が君臨しているのである。

倫理問題等に対しても一般的にも極めて厳しく、夫人の不倫問題で学生が大学から退校になる事も珍しくない。当時は将校の勤務評定書に家族の状況についての記載欄があり、いかに将校夫妻が、上級者夫妻にアピールして各自の評価を上げるか、私ども、側面から見ていてまことに涙ぐましいものがあった。その為かことある毎の家族招待パーティの連続で酒に弱い私など大閉口であった。

人事は中央の集中的管理とはいいいながら、直接の上司の権限は恐ろしいものがあり、この点、自衛隊はそんな懸念は少なく、まさに天国とも言えよう。

## 終わりに

座間の在日米陸軍司令官のワイアンド中将との間で、退職前、友人同士の打ち解けた懇談のひとつときを持った際、彼の日本文化に対する強い憧憬と知識を知らされて驚いたものである。

その彼が懇談時申し出たのが、「一般人としての皇居の見学が出来ないだろうか」という事であった。やはり、日本は米国人にとって神秘的に満ちた歴史と伝統の国であり、その根源は皇室にあるとの認識で、宮城を見学したいと言い出したようである。

実現したのは翌年6月であった。皇宮警察の知人を介して特別に見学の許可を取り、私服の彼をゆっくりと案内したが、武蔵野の自然を活かした荘厳なたたずまいに、感嘆の声しきりであった。たまたま、現在の自衛隊の上級指揮官に与えられている、戦前からの唯一の遺産とも言い得る、年一回の陛下への拝謁の話が出て、私が5回もその光栄に浴した事を伝えると、「米国にはその様なことは無い。本当に素晴らしい事だ」と心か羨ましい面持ちであった。

私が米陸大で、米国や各国の学生の前で「日本軍事学講座」を開くことが出来たのも、明治以来の我々の諸先輩が営々と築き上げてきた伝統と栄光の累積によるもので、敗れたりといえども、世界を相手に敢然と戦った軍人諸先輩の思いがけない貴重な遺産の一つとも言えよう。自衛隊も今や陸士出身者は消え、防衛大学校卒業生の時代に入っているが、このような遺産はしっかりと守ってってもらいたいものである。